

新

歌人群像

吉野秀雄

● 天井凝視の歌人

● 安森敏隆



吉野秀雄は、一九〇二（明治三十五）年七月三日、群馬県高崎市に生まれる。慶応義塾大学を中退し、療養生活の中で正岡子規やアラギ派の歌に影響されて作歌をこころざすのち、秋艸道人（会津八二）の歌集『南京新唱』に影響されて師事することになる。歌集は、処女歌集『天井凝視』（一九二六〈大正十五〉年）のほか、『吾徑集』（一九三六〈昭和十一〉年）、『早梅集』『寒蟬集』（一九四七〈同二十〉年）、『晴陰集』（一九五八〈同三十〉年・『吉野秀雄歌集』として『寒蟬集』と『晴陰集』二冊を収録して発行）、『含紅集』（一九六八〈同四十三〉年）の六歌集がある。このうち、最後の『含紅集』は、生前、作者自身が用意していた歌稿に「未定稿・最後の歌」を加えて没後刊行されたものである。吉野秀雄は、歌集が成った後も、一首一首の歌や内容に関して徹底的に修正し、推敲に推敲を重ねていった歌人である。ここでは、最終的に、定本と見なされる『定本吉野秀雄全歌集』（弥生書房）によって歌を抄出した。

天井凝視の視点

最初の歌集である『天井凝視』は、明らか

に正岡子規の病床吟と随筆『病床六尺』に
影響されて作られたものである。「後記」で、
「天井凝視」といふ題名は私の安静生活の象
徴のつもりである。健康者に自家の天井板の
柵目の数を問ふのは愚かなる諧謔に過ぎぬの
であるが、六尺の床に無期限の正面横臥を命
ぜられた病者にとつては、かの無味な直線の
冷やかに交錯した天井板の光景が大いなる関
心世界となり、替難い慰楽場裡ともなるので
ある」と言い、子規が「病床六尺、これが我
世界である」（『病床六尺』）と言ったパース
ペクティブ（遠近法）に拮抗させ、六尺の床
から天井板を凝視しながら、うたったことが
書かれている。

氷枕に圧されてゆがむわが眼鏡歪め
るものをめづらしみ見つ 『天井凝視』
ひさしく見てをりしとき檐の端のふか
き曇りをよぎる鳥あり
病床に稲のみのり穂手にとれば国境の
山の雪が目に見ゆ

一九二二（大正十二）年の十二月に東京・
上根岸の子規庵を訪ね、それ以降、正岡子規、
伊藤左千夫をはじめとする「アララギ」派の
歌人の歌に傾倒する。翌年の三月、肺患にか
かる。一首目の歌は、自己の「もの」を見る

目の位置と「心」の在処を如実に見せている。
「氷枕に圧されてゆがむわが眼鏡」の位置か
ら天井を凝視しながらも、「めづらしみ」見
ているのである。そうした病床に仰臥する位
置にいながら、「目」は天井を越えて、さら
に空の「鳥」を捉え、「国境の山の雪」をも
捉えてうたつていくのである。

はく痰も吐く痰も赤く血みどろなり眼
持てれば見ざるべからず 『天井凝視』

そうした状況の中で、自己自身の生身の姿
をも赤裸々に捉え、写している。赤く血みど
ろの「痰」もうたわれている。一九二六（大
正十五）年の四月、気管支性喘息を発し、こ
れより生涯にわたる療養中心の生活が始まる



再婚当時の吉野秀雄と、妻とみ子
(1947<昭和22>年)

のである。この病氣と前後した頃より秋艸道
人（会津八一）の『南京新唱』に傾倒し、教
えを請う。その後、一九三三（昭和八）年
になって、秋艸道人を訪ね門人となり、『万葉
集』、『歎異抄』や良寛の歌や書を勉強する。

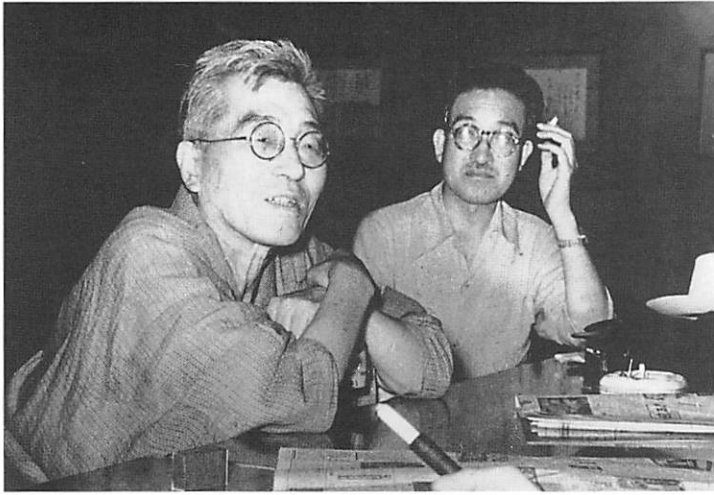
妻の死、母の死と新しい妻

一九二六（大正十五）年、栗林はつと結婚。
一九四四（昭和十九）年八月、妻はつ病没。
一九四六（同二十二年）年、鎌倉アカデミア文
学部の教師となり、廃校までの四年間勤務し、
専ら著述にしたがう。第二次大戦後、『早梅
集』と『寒蟬集』を刊行した頃より生命の究
極を深く見つめた自在の境地が展開される。

「この集、妻の死を哭する歌
によつてはじまり、母の病を
うれへこれを葬ふ歌をもつて
をはる、一は初秋他は中晩秋、
いづれもその悲愁の日かず、
秋蟬の唧の韻きと分つこと
はできない。もつて、これを
冠して一巻の表徴とした次第
である」という「後記」が付
された第三歌集『寒蟬集』は、
一九四七（同二十二年）年十月

吉野秀雄

師の会津八一（左）と、銀座・松坂屋で
（1954〈昭和29〉年）



二十日、創元社から発行される。まず最初に敗戦を一年後にひかえた妻の死ではじまり、その亡き妻への想いと残された子供達への愛と生活の歌でみたまされている。

九州を米機の襲ふ夕まぐれ妻の呼吸の
やうやくけはし
夜の風に灯心蜻蛉ただよへり汝がたま
しひはすでにいづくぞ
『寒蟬集』

母死にて四日泣きぬしをさながら今朝
登校す一人また一人

これらの歌には「昭和十九年夏、妻はつ子胃を病みて鎌倉佐藤外科に入院し、遂に再び起きたず、八月二十九日、四児を残して命絶えき。享年四十二」と詞書にある。秀雄は子規の写生から出発し、会津八一の古語、古調をとり入れることによって独自の歌風を確立した。そして妻や子を闇明に叙述することによって、その「生命」を映し出すところに特徴があった。

去年妻をなくしし我をいやましにいと
しみまして母は逝きにき
霜月のひかりすがしき聖石橋母の柩は
いまわたりゆく
逢坂の雑木黄葉の梢を這ふけぶりを母
と思ふべきものか
『寒蟬集』

さらに一九四五（昭和二十）年の敗戦後の秋には、母の死をもうたうことになったのである。このように『寒蟬集』は妻の死をうたい、実母の死をうたいながら、そうした身近なもの「生命」が、戦争期における人々の「生命」にも通底し、共鳴してゆくところに秀雄の歌の特徴がある。究極の命を見つめる

ことによって、身近な妻や子の「生命」が、戦争期における戦死者たちの「生命」にも通じていったのである。

これの世に二人の妻と婚ひつれどふたりは我に一人なるのみ
『晴陰集』

さらに、はつ亡き後、詩人の八木重吉の妻であった八木とみ子と結婚し、「二人の妻と婚ひつれどふたりは我に一人なるのみ」とうたい、世上の同情と評価を得ることになる。

「富士」と「生命」への対峙

敗戦後、いち早く同世代の近藤芳美は自ら「新しい歌とは何であろうか、それは今日有用の歌の事である。」（「新しい短歌の規定」というマニフェストを書いて、戦後の短歌が政治的視野をもたねばならないことを主張した。それに対して宮柁二は「私には、敗戦を契機として卒然とした思想の変化など来なかつた」（『小紺珠』）と云い、目の前の「小現実」に注目して歌をつくり、敗戦後の混乱期の中で自己の実存を時代に向かって対峙させ独自の歌をつくりあげていったのである。

そうした中で、吉野秀雄はいずれの短歌結

鎌倉・端泉寺の吉野秀雄の歌碑。1968（昭和43）年、除幕。「死をいとひ生をもおそれ人間のゆえ定まらぬころ知るのみ」



社や団体にも所属せず、ただ独り孤高の歌人として自己の「生命」や、外界の「自然」を見つめてうたいつづけていったのである。「生涯の歌は子供を含む多くの人への挽歌と二人の妻との愛、そして繰り返し歌った富士の歌が基本的なテーマであったといえよう」（近代短歌の鑑賞77 吉野秀雄「影山一男」と言われる所以である。

わきのち
我命をおしかたむけて二月朔日朝明
の富士に相對ふかも
『寒蟬集』

赤松にまじるくろ松黒松の太しき間に
高し富士
太白星の光増すゆふべ富士が嶺の雪は
蒼めり永久の寂けさ
時久に疑視らふ富士の靈異の魂わがむ
らぎもを揺りてすがしき

これらの「富士」の歌は、一九四六（昭和二十一年）年十二月刊の「創元」創刊号に、妻はつの死の歌と共に「短歌百餘草」として載り、会津八一に「はじめて歌よみの一人として公然世に立ち向ふことを許された」（『寒蟬集』後記）ものである。「我命」と「富士」が対峙し、「富士」が何よりも高く聳え、「永久の寂けさ」をまして光り輝いている。「旅好きだった吉野さんは、晩年と若い時期の闘病時代は別として、よく旅をした」（上村占魚「写生念念不停流」）と言われるくらい、よく旅をし、短歌を作った。それらの結晶は、以降の『晴陰集』や『含紅集』のなかの全国各地を遍歴した時の旅行詠に多くみることができるといえる。

一九六六（昭和四十二年）年八月十五日夜半、呼吸困難に陥り、危篤になったときの「病中雑詠」と題された歌がある。

一息の駐れば泥土たらむのみ時の間す
らも惜しまざらめや
『含紅集』
ベッド下に置く尿瓶を手に取れど持ち
上げむだけの力はやなし
吸呑の水をふた口三口飲みこころしづ
めて念仏申す
神妙に——な—も—わ—あ—み—だ—ぶ
ち——唱ふれど辺地懶慢も覺束なわれ
は
聞くならく吾が事祈る方が賽銭箱に
涙落しき

これには「去年の八月死ぬべかりしを、苦しみ苦しみつも生き生きて今尚短き息をつけり。不思議といふべきのみ。をりにふれての歌」という詞書がある。息が止まれば「泥土たらむのみ」の自己がうたわれ、ベッドの周辺にある「尿瓶」や「吸呑」がうたわれ、此岸と彼岸のはざまにあつて、「な—も—わ—あ—み—だ—ぶち」（南無阿弥陀仏）を唱えながら、生死をこえた自在の境地が短歌の韻律を借りながらみごとにうたいこまれている。これらの歌をうたった一年後の一九六七（昭和四十二年）七月十三日、享年六十六で亡くなる。（やすもり・としたか 同志社女子大学教授・ポトナム選者）